

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 26号」

ベストピアは小原靖夫の個人誌です。

平成二十六年二月
第二十六号

< 2014年 2月 >

古賀 順子

モナリザ

毎月第一日曜日は、フランスの多くの美術館、歴史的建造物の入場が無料です。ルーブル美術館も例外ではありません。今冬パリは暖かいですが、雨ばかりです。日曜日のひと時を美術館で過ごす人も少なくありません。

ルーブル美術館を代表する作品といえば、レオナルド・ダ・ヴィンチ「モナリザ」でしょう。1503-1506年にかけて、79,4x53,4cmの支持体（ポプラ材）に油彩で描かれた「モナリザ」、5世紀を経た今日もなお愛される理由があります。ルーブル美術館の敷地内に C2RMF (Centre de Recherche et de Restauration des Musées de France : 国立フランス美術館修復・研究センター)があります。美術品の修復、鑑定、研究を行なう機関です。前任の情報技術資料部長クリスチャン・ラーニエ氏は、著書「モナリザ、科学的エッセイ」(C12 Editions, 2007年出版)で「モナリザ」の秘密を科学的見地から解明しています。レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519)の「絵画論」に沿って、ダ・ヴィンチの科学、芸術、自然観をまとめています。

「モナリザ」の大きさ(79,4x53,4cm)は黄金比、つまり $1:\sqrt{2}$ です。さらに黄金比の方眼で画面を分け、作品の中心にモナリザの左胸(心臓部)、上半分の中心に左眼を描いています。顔の輪郭、両眼と口の比率、腕や指の長さなど、すべては「絵画論」に記されている「カノン」通りです。土木建築家として、当時フィレンツェ郊外にダム設計を指揮していたダ・ヴィンチは、背景にキアナ橋を描いています。水(湖と河)、空気(空)、土(曲がりくねった道)、火(モナリザの手元や服に反射する燠火)、自然の四要素も巧みに取込まれています。数学、物理学、

医学など、人間の科学への信仰が目覚めるのがルネサンス期で、それを具現化しているのが「モナリザ」といえます。

絵画の観点からは、「モナリザ」に神秘的で、透明感に溢れ、繊細で微妙な表現を与えているのが、何層にも重ねられたグラッシというテクニックです。ルネサンス期の画家たちは、光の反射による明度、彩度、輝度の効果を知っていました。支持体に白の層を使い、色を塗って乾かし、その上に透明な油性のグラッシ層を重ねることで、独特の透明感、奥行きが生まれます。各層で光の反射が異なるからです。「モナリザ」の中心点である左胸は、一番明るく輝く部分でもあります。顔や胸の肌色が微妙に美しく描き分けられているのも、空気の色、山の色が深く変化して見えるのも、何層にも塗られたグラッシの効果なのです。

ダ・ヴィンチより半世紀以上前に、初期フランドル派の画家たちはすでにグラッシの効果を活用していました。イタリア・ルネサンスの目覚めに活躍するマザッチオ(1401-1428)の「聖三位一体」(フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ教会のフレスコ画)とほぼ同じ時期に描かれたのが、フランドルの画家ヤン・ファン・エイク(1395頃-1441)「神秘の子羊の礼賛」(ゲントのサン・バーボン聖堂)です。ともに1430年前後に描かれたとても大きな作品です。「神秘の小羊」は何層ものグラッシによって、フレスコ画では表現できない透明感、輝き、複雑な色彩と質感を見事に表現しています。ファン・エイク兄弟の師であるロベルト・カンピン(通称フレマールの画家)(1375頃-1444)「受胎告知」(ブリュッセルの王立美術館所蔵)も同じで、フランドル絵画特有の冷たく澄んだ空気感、色彩の透明感は、当時、絵画の地位がいかに高く、最新の技術と才能を必要としていたかを想像することができます。